



# 武 州 み た け

第五十七号

「紅葉且つ散る」

令和四年大河ドラマの舞台は鎌倉時代です。当社とも縁の深い畠山重忠公が登場します。愛馬を担ぐ強力の印象とは一見異なる役者。果たして如何描かれるのか。楽しみです。

(写真・文 服部朋也)

写真左から、三宅義信さん、宮本昌典選手  
糸数陽一選手、稻垣英二さん



## 重量挙げ選手 必勝祈願

この度の東京オリンピックに出席された、六十一キロ級・糸数陽一選手、七十三キロ級・宮本昌典選手、

一九六四年の東京五輪の「金メダル第一号」ほか数々の記録を樹立された三宅義信さん、コーチの稻垣英二さん。

六月二十七日（日）にご来社され、

オリンピック必勝祈願ならびに「夜神樂」をご覧になられました。



令和二年十月二十九日、馬絹御嶽講の太々神樂奏上がございました。馬絹講は代々毎年四月に太々神樂を奏上し続けて来られ、令和二年は継続百周年・百回目の記念の年。コロナ禍に伴う緊急事態により継続が危ぶまれましたが、延期を重ね役員六名のみのご参列にて奏上されました。心よりお祝い申し上げます。

### 【訂正とお詫び】

『武州みたけ 第五十六号』「太々神樂奏上」の貞にて、「昨年（令和二年）は残念ながらコロナ禍において太々神樂を奏上することが出来ませんでした。」と誤つて記載いたしました。ここに深くお詫びし、訂正させていただきます。

新型コロナウイルスによる、いわゆるコロナ禍がはじまり約二年。未曾有の事態に一度目の緊急事態宣言下では社務所を閉鎖。御師たちは講中の皆様へ御札を配り歩くことはもとより、お住まいの地域への移動さえも憚られるという状況に頭を悩ませ続けました。

ただ神社としては、人が集まることが忌避されるなかであつてもご信心いただく皆様をお迎えしたい。ご祈願を望む方々をお止めいたくない。そもそも神社は緊急時にこそ開かれていかなければならないのではないか。試行錯誤を重ねながら、山内一丸となり感染症対策を講じてきました。

次から次へと状況が変わるなか、最前線で尽力いただく医療関係の皆様、生活に不可欠な業務に従事される皆様、感染防止に努められる皆様、そして当山を気に掛け来山をご自粛いただきました講中・崇敬者をはじめとする皆様へ心より御礼申し上げます。御嶽大神様の御守護と皆様のお蔭様で山内に感染者を出すことなく過ごさせております。

ウイルスが消え去ることはないと聞きます。弱毒化し、お付き合いしやすくなるまでにはまだまだ時間がかかりそうです。マスクやカーテンに

日々は続きますが、自分に出来る範囲の対策を徹底していくことが第一です。良き方へ向かっていると信じ、引き続き皆で努めて参りましょう。神職一同、日々祈りを捧げ、勤めて参ります。



早期終息を  
お祈りしよう！

## 「コロナ禍」によせて

### 川崎市宮前区馬絹御嶽講 「太々神樂継続奏上百回」

令和二年十月二十九日、馬絹御嶽講の太々神樂奏上がございました。



## 「身祓社」

## 『何足の草鞋?!』

権禰宜 久保田 享



ケーブルカー 滝本駅近くの小川を渡す禊橋を越えると、御岳山登山口には大きな御嶽神社の鳥居があります。その右手に流れる「龍頭の滝（禊の滝）」のほど近くに、小さなお社があるのをご存知でしょうか。この滝は、明治時代の社伝によれば「往古ヨリ登山者ノ禊所トシテ滝アリシヲ享保年ヨリ山下御師滝本坊再興シ」とあります。御嶽神社は古くは修驗道の修行場として発展しましたが、江戸時代に神社詣が流行した際も、全国津々浦々から参拝者が訪れました。

電車や車などない時代、徒歩や馬をひきながら何日も何週間もかけて御岳を目指しました。参拝者たちは、いざ山の麓に到着すると

神聖なお山に入る前にこの滝に打たれ、身体を清めました。心も体も清めた参拝者は最後の御坂を登り、宿坊の御師たちの手引

きを受けながら、宿願であった御嶽神社へ

の御参拝を果たすわけです。その滝より向かって左に小さなお社がございます。「身祓社」は武藏御嶽神社の境外末社として、大祓日神、大直日神、伊豆触賣神、速佐須良比賣神の四柱が祀られております。

享保年間から何度か修繕はされていましたが、滝のそばにあるため腐朽が酷かつたため、このたび修繕し社殿をお取替し、六月十三日に祭典をおこないました。

ケーブルカーを待つ間、滝の水で手を清め、木漏れ日の揺れる身祓社にお手を合わせながら、御嶽詣の歴史に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

（文 権禰宜 馬場慶太郎）



私がこの山に帰ってきて早二十年が立ちました。神主として神社に奉仕し、家に帰ってはお客様をもてなし、観光協会の会議に参加し、消防団員として人命救助を行う。そんな私は「何足の草鞋」を履いているのでしょうか。それは江戸時代より栄えたこの集落が、今現在も当時の生活を色濃く残している事に理由があるのだと想います。

当時から御岳山の神職は「御師」と呼ばれ、各地に出向き配札や祈祷を行い、来山した講や参拝者を泊め、お世話をするのが仕事です。（御師活動を今も継続しているのは全国でも珍しく貴重です。）そして時には林業などその時代時代に必要な様々な仕事をして生活を守ってきました。当時からすでに「何足の草鞋」を履いていたのです。

山間の生活のため、すべて自分達で何とかしよう根性（？）が染みついているのでしょうか。町のようには警察・消防・病院・コンビニすらありませんから。私も先輩達の背中を見て育ちましたので、少なからずわかつてはいたのですが、本心では「なんでこんなにやる事が多いんだべ！」と若い頃には随分悩んだものです。今ではすっかり諦めもつき、逆に誇りを持つて仕事に向き合う日々となりました。神社の立場から、観光の立場から、自治の立場から等々、これから先百年、いや千年とこの御岳山を存続させる為の配慮を先輩達がし続けてきたように、私自身も時代に合ったやり方で続けています。

時には神主、時には宿の主人。消防団で救助したかと思えば、はたまた観光協会のイベント、野良仕事と早変わり。そんな「何足もの草鞋」を履く山の生活を、これから私の主観全開で少しづつ、ご紹介したいと思います。

（次回へつづく・・・）

市指定有形文化財  
「金小札段威一枚胴具足」

日本風俗史學會會員  
前青梅市文化財保護審議會會長  
齊藤慎

齊藤慎

武蔵御嶽神社は、平安時代の晚期、鎌倉

時代中期、そして室町～江戸時代まで政権の中心となつた武士階級の七百年間を反映

した武具が神宝として伝承されています。さらに、古来より恒例の祭祀に、神器とし共奉せられて、日本全国の神社の中

ても稀少な存在です。平安晚期の赤糸・鎌  
君中期の紫麁濃の二領の大鎧は有名ですが、  
か、今回は江戸前期の新しい形式の「当世  
足」を紹介しましょう。

中世の一騎懸での騎馬戦用の大鎧に付して打物・集団・徒歩戦の「胴丸」から先達し、戦国時代の終わりに「当世具足」が定着します。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ

胄であることを確認しましよう。

一、兜の鉢の矧板数が少ない。御嶽具足の矧板数は五枚矧ぎの頭形鉢です。  
二、全体が小札仕立ではなく板仕立です。

す。御嶽貝足はそれらを欠失していますが、  
肩上に取り付けた孔<sup>あな</sup>が残っています。

鉄板で、草摺は革板の段。威毛は簡略で、  
疎らな威（素掛）や鉢止めのものも出現します。  
肩上は鉄板で覆います。御獄貝足もその通

りですが、鉄の板を細工して、金彩色の小札にみせて伝統的な毛引威とする手の込んだ装飾を施しています。しかし、胴が板では小札仕立のような弾力がないので、左脇に蝶番をつけ、着脱の便利をはかり当道具足の主流の「二枚胴」とします。

三 脩の各段は、章紙で縫ひとめた伸縮式の横矧の「立胴」、または、一枚板を五分割し、縫矧の立胴（雪の下胴・仙台胴）。共に内側には漆塗りの一枚革の浮舟の「浮舟立胴」をはります。御嶽具足は横矧ぎ立胴です。そして、立挙、長側は一段ずつ増え、前立挙三段、後立挙四段、長側五段。従つて、胴は丈長（たけなが）（高）となり、肩上（かたがみ）は短めです。正面での胴丈は、35.7cm。肩上は16cm。肩上の表面は鉄板でかたく、胴部を吊り上げます。しかも首筋の防禦もかねて幅広く、ここに籠手（わなて）の質に重ねて袖も取り付ける籠手付の戻（責鞋）も出て、当世具足の肩上の典型です。御嶽具足も、クレーンのよう膚を吊り下げる堅固さです。その上、肩上の根もとの襟上（えりがみ）につけねが拡大した形です。小鰐や満智羅、立襟などという首回りの防具が取り付けられるので、少し年代が降つたかたちです。首回りの防具は、亀甲形鉄を縫い付け、韋につつんだ防具で、隙間のない防禦をめざした当世具足構造を示します。

肩上に取り付けた孔<sup>あな</sup>が残っています。四、胴の形状で当世具足の注目すべき点があります。胴の胸のあたりがよくらむよ減らしてゆく。正面からみると洋樽のようになります。中フクラミです。御嶽具足は二段目で、下に向かって増え、長側一段目の小札頭で数える上から33枚で、下に向かって増え、長側一段目の小札頭で数える上から33枚は146枚、二段目148枚、三段目146枚、四段目142枚、五段目135枚となり、中フクラミです。腰まわりが縮まるわけです。人体の運動機能発揮を考慮した構造です。この具足を真正面からよく見てください。中世の大鎧に無い当世具足の機能的な美しいかたちです。背中には背骨を考慮した背撓<sup>せいた</sup>という微妙な縱方向のくぼみをつくります。長側五段目には人体の腰のくびれに合わせた外反<sup>そとぞり</sup>が、左右に両脚の運動を考慮した割込<sup>くりこみ</sup>が、そして背撓の末端の胴尻には、なんど尾骶骨<sup>びさいこつ</sup>の運動を配慮した割込まで工作するのです。当世具足の基本構造部分を小札でなく「鉄板」にしたから可能な造形なのです。注目すべき具足の運動機能重視の構造です。これら造形の萌芽<sup>めいが</sup>は、中世末期の胴丸にも指摘できるのですが、当世具足はこれを定型としたのです。御嶽具足は外の胴丸にも指摘できるのですが、当世具足はこれで定型としたのです。御嶽具足は外からみても、よくそれがわかる定型定着期の当世具足です。生死をかけた戦闘の中での人体への配慮の行き届いた甲冑です。五、草摺<sup>くさづり</sup>は御嶽具足にみる六間五段が多く、そして、軽い革板仕立という点が大切です。五段の各段の下隅の角は丸く<sup>こまる</sup>、

した上で、弓なりに横に反りつけます。各段の裏面には、細長い鉄板を弓なりにして、搦みつけて、反りを固定します。足のさばきを考慮した点は、胴の胸部への考慮と同様です。そして胴に続く毛引糸である搖糸（ひびき糸）を、は長い。御獄具足の場合9cmあります。中世の鎧や胴丸の搖糸は3cm程ですから随分長くなっています。胴を付けて、この搖糸（ひびき糸）の上から縄締の緒（緒所は胴丸と同じ）を強く締めると、胴が押しあがり、肩上が肩から浮き気味になり、鉄肩上で立胴構造のため、胴尻の腰撓部分で肩にくる重さを受けて、肩への負荷を減らすことになる。それに草摺は持ち上がりつてひらき、大腿部にまつわりにくくなる。肩先・腰の運動機能的構造で、それに配慮した当世具足の機能的構造です。その上に、上帯を締め刀を差すのです。そして草摺と袖の最下段の菱縫板は、畠目も菱縫も省略される。そのかわりに物にあたりやすい草摺の菱縫板には、熊毛をうえ、機能としては消音の効果と、全体の金小札に對し色彩効果を出しています。

です。「付属品共一式」が中世甲冑とは異なる当世貝足の大重要な特徴です。さて、御獄貝足は、現在小貝足の面類が無く、類似のものを取り合わせています。面類の垂は、白・啄木・紅糸（退色する）の段威、金箔の板物で、一見類似しますが、よくみると違います。

七、御獄貝足は板物ですが、漆下地を厚みのある本物の小札のように盛り上げ、黒漆に仕上げて金箔を彩色、本小札より精巧な仕立です。本物の小札のような経年による不揃いもないでの、綺麗に小札頭が揃っています。毛引威色は萌葱系統の啄木糸と、紫色と段々に威した安土・桃山期の金小札色、威胴丸の名品を連想させる美しさを持つ当世貝足です。

籠手は、よういりで、いう古来より用いられた鎖籠手で、肘金は八重菊、七耀文を五つ配し、手甲まで金箔を押した華麗さです。残念ながら綴じ付けられた家地（布）は欠失ですが、裏は麻で芯は木綿で表地は平絹であることが「佩楯」の家地部分から想像できます。佩楯は四入に筏金を加留多鉄（カルタ型の鉄板）の小鉄片を鎖で繋いだもので、やはり金箔を置いた鉄物で豪華な同一意匠です。なお膝を防禦する佩楯について、下半分の鉄板鎖つなぎの部分に接する「於女里」という横韋に、縦に配した「力韋」の左右共に、正平六年六月一日と文字を染め付けます。正平六年（一三五二）は南北朝時代の年代ですが、これは一種の商標で近世の韋で「八代韋」「御免韋」ともいいます。（『装劍奇賞』）佩楯も籠手も鎖仕立て金箔置きという点で、胴・兜・袖と同一意匠です。

八、当世具足の部分は、角はみな丸味があり、籠手と袖の冠板、草摺の菱縫板、鉄具廻りの輪郭、輪一段目小さな兜の吹返しみんな角が丸っこい。「小丸」仕立てです。兜の輪郭は、日根野輪、饅頭とならんで当世具足に多い「当世輪」ですが、その菱縫板は軽やかに曲面を作つて外に反り出し、下縁の輪郭は、肩の袖の冠板の山形を受けて浅くなだらかに割り込む「肩摺り」という線です。美しい機能美です。類似の輪郭は、兜の鉢の正中板の下縁のうねりの曲線もあります。なお、鉢の左右の腰巻板には鉄線の角元を打ち（馬手側欠矢）、角を左右に立てていたのです。面や眉庇の裏が朱色塗りである点は当世具足の特徴です。

金色色といえば、鉄具廻、すなわち肩上、脇板、胸板の色どりです。これらはすべて黒漆仕上げ。草摺の菱縫板を黒毛にした感覚です。丸源氏打ちの繩の、当世具足の高紐を押付板から、途中を蛇結びにして、手先の孔から責鞋を出す。肩上は、縁はなく、他の鉄具廻りは、縁を捻り返して覆輪に見え、金泥で金の覆輪を彩色しています。とても優れた金色色の使い方で、覆輪は細く品良く、しまつて見えるのです。

てゆきます。そのきざしは、すでにこの具足の胸（立挙一段目）の左右の二つの菊座の鎧、弓手の「手拭付の鎧」と馬手の「采配付の鎧」（欠失）の付設にあらわれます。また鉄肩上の付け根が押付板と一体化し、さらに押付の上部肩上の付け根が襟上状に広がるところ（襟まわり綴じ付けの余白）に年代の下降がみえます。しかし、（切付板）金小札段威二枚胴具足は初期の簡素な装飾で、過剰にならない実用の美を残している年代に制作された機能美を失わぬ、安土・桃山風の感覺で仕立上げに現存する数少ない遺例です。

ちなみに、大宮司金井家文書（目録Ⅲ・4・(2)ー5）の神主・社僧・御師・惣代から、享保十九年（一七三四）寺社奉行井上河内守役人宛提出の「武州御嶽宝物覧」に「御具足 二領」「是者三十五年巳辰年從常憲院様拝領仕候」とあります。すなわち、元禄十三年辰年（一七〇〇）五代將軍徳川綱吉の造営時、寄進の「御具足」二領が存在していたのです。

私は、この具足にその二領のうちにふさわしい制作・年代・品格があると思います。四十五年余の昔、私が師事した日本甲冑研究の大斗、山上八郎先生は、旧宝物殿でこの具足を前に、このような「当世具足」を「寛永具足」と呼ぶと年代評価なさつていました。その翌年、昭和五二年（一九七六）十一月三日に、市文化財に指定されたのです。私はその後、山上先生の高弟、山岸素夫先生に師事し、同門であつた甲冑師西岡文夫氏が今回、緒所など、考証正しく、近世前期の当世具足を眼前に鑑賞、理解でき形姿に修理された事を感慨深く思ひます。

## 緋色の鎧

西岡千鶴

武州御嶽神社所蔵の国宝「赤糸威鎧」は甲冑の名称が表しているように赤い糸で組まれた組紐が鎧全体を覆っています。大部分は明治時代に行われた修理時に化学染料で染められた組紐で、色が褪せて紫がかつた色に変わっていますが、部分的に残る本来の威糸は八百年以上経ているにも拘わらず濃く鮮やかな赤色をとどめています。平安時代末期から鎌倉時代を通していくつかの赤糸威鎧が作られていますが、それらは例外なく鮮やかな赤色です。

平安時代に成立した『延喜式』には赤色を染める材料に茜、蘇芳<sup>すおう</sup>、紅花が記されており、特に茜を用いた場合の色名に「深緋」「浅緋」という字をあてています。緋という字の中の非は羽が左右にぱつと開いた様を表し、そこから緋は目の覚めるような鮮やかな感じを与える糸や布の意になつたといわれています。同じ赤色でも蘇芳、紅花は褪色しやすく、陽の光の下でも常に輝くような赤を発する茜染めにこそ緋の字をあてたのではないかと思われます。

茜は含まれる色素成分の違いにより、日本茜、西洋茜（原産地はペルシヤ、インド）に分かれ、どちらも根に色素があります。日本茜はアカネ科の越年草で四枚の葉が放射状に開いて黄緑色の小花が咲き、秋には黒色の実が成り、棘<sup>とげ</sup>があるので繁茂すると絡まりあつて雑草然とします。源氏物語や枕草子に八重律<sup>やえじゆ</sup>とあるのがそれです。西洋茜は六葉茜とも呼ばれ、六枚の葉を持つています。

武州みたけ



日本茜草

三十年ほど前までは茜で濃色に染めるのは非常に困難といわれており、当時、青梅市からの依頼を受けた赤糸威鎧の復元模造製作において、染色と組紐を担当していた私は、かなり失敗を重ねましたが、茜染に関するいくつかの論文に出会えた僕僕もあり、濃色に染めることができた時は心から安堵しました。当時の研究では西洋茜で染められた、と報告されおり、私も西洋茜で染めましたが、そ



の後、某甲冑研究家から譲られた御嶽神社所蔵の赤糸威鎧の威糸の残片を、平成十五年、共立女子大学教授齋藤昌子先生により最新機器を用いて分析を行つていただいたところ、日本茜による染色であることが分かりました。近年の研究によれば、濃色に染めることも比較的容易であることがわかり、日本茜を栽培する方も増えてきているようです。

この日本茜染の威糸の平組紐には現存する他の甲冑には見られない特徴があります。鞘<sup>さや</sup>、袖、胴の部位ごとに使われている平組紐の幅を変えていることで

織物は絹糸と緯糸が九十度の交差による組織ですが、組紐は糸が斜めに交わる組織なので、紐の表面はV字が並んでいます。Vを二<sup>うね</sup>畝と数えますと赤糸威鎧の鞘は十畝、袖は十二<sup>うね</sup>畝、胴は十四<sup>うね</sup>畝になっています。

幅の調整をしているのですが、この組紐の組織は全て「二間<sup>うけ</sup>と三間<sup>さんけ</sup>の混合組<sup>うみあわし</sup>です。

「間」は組紐独自の表現で、二間は一条の糸が二条の糸を越しつつ組まれていくことです。そして、二間三間混合組であることから「クテ打組紐技法」で組まれたことが分かります。また、赤糸威鎧には、ふんだんに使われている赤色を引き締めるように耳糸、畠目<sup>うなめ</sup>は紺、浅葱<sup>あさぎ</sup>、白色の段柄の角組ですが、明治の修復時に付けられた耳糸や畠目は本来の紐とは構造が異なっています。残つて

いる当初の耳糸は三六条、畠目は二六条で、いずれも現在広く行われている丸台と錐玉による技法（桃山時代～江戸時代初期に導入される）では組むことが困難で、これもクテ打技法で組む方が理に叶い、また容易でもあります。

この組紐技法は古代から日本を含む世界各地で行われており、現代まで数か国で続けられていますが、わが国では一度滅んでしまいました。この技術は三十数年前に復元されましたが、少しでも当時と同じような紐を再現できるよう精進しなければと思つています。





ホンモンジゴケの名前の由来は、東京の池上本門寺で初めて見つかったことからその名が付いています。この苔が武藏御嶽神社の境内に彩りと柔らかな静寂さを醸し出しているのです。

普通苔は子孫を増やすために、粉状の胞子を風に乗せて旅をさせ、その胞子は気に入った場所に着地できることで成長して新しい生活を始めます。ところがホンモンジゴケは全く違う方法で子孫を増やします。この苔の胞子は日本ではほとんど見られません。ホンモンジゴケは自分の体の一部、つまりクローンで生育場所を広げていくのです。それでは、どうやつてこの山の中に移り住

ません。

普通苔は子孫を増やすために、粉状の胞子を風に乗せて旅をさせ、その胞子は気に入った場所に着地できることで成長して新しい生活を始めます。ところがホンモンジゴケは全く違う方法で子孫を増やします。この苔の胞子は日本ではほとんど見られません。ホンモンジゴケは自分の体の一部、つまりクローンで生育場所を広げていくのです。それでは、どうやつてこの山の中に移り住

ません。

普通苔は子孫を増やすために、粉状の胞子を風に乗せて旅をさせ、その胞子は気に入った場所に着地できることで成長して新しい生活を始めます。ところがホンモンジゴケは全く違う方法で子孫を増やします。この苔の胞子は日本ではほとんど見られません。ホンモンジゴケは自分の体の一部、つまりクローンで生育場所を広げていくのです。それでは、どうやつてこの山の中に移り住

ます。ホンモンジゴケについて、御岳山の苔の愛好家、元ビジターセンター解説員の井口さんのお力を借りてお話しします。

他の苔たちは、重金属の成分が大の苦手というより大敵なのに、ホンモンジゴケは銅のあるところないと生きていけないという性質をもつていて、苔同士の生存競争のはて、銅の近くで生きる場所をみつけたホンモンジゴケ。銅成分を体に取り込み生きるすべを身に着けました。神社の銅葺きの屋根の下、銅の灯籠の足元、銅があれば、ホンモンジゴケはご機嫌。多少踏まれても、はがれても、気に入ったその場所は手ばなし

ません。

その昔、御岳参りの無事を祈念して、地元の神社に参った講の人々の足元は旅文度の草履。その神社にいたホンモンジゴケのクローンが草履の隙間に滑り込む。そして、御岳山までやつてきました。たどり着いたそこには、立派な銅葺き屋根のお社が・・・。新天地をみつけたホンモンジゴケにとって最高の幸せだったのではないでしようか。

これはあくまで想像にすぎませんが、静かに変わらず、神社の風景をより味わい深いものにしてくれているホンモンジゴケは、今では神社の一部です。本殿の周りに敷き詰められた玉石の上、常磐堅磐社（旧本殿）、皇御孫命社の周りでその姿を見ることが出来ます。特に雨上がりは奇麗ですよ。

## 『ホンモンジゴケ（本門寺苔）』

片柳 茂生



まさに賛否両論の中開催された東京五輪とパラリンピック。日本選手の受賞や入賞の数はかつてない多さとなりました。コロナ禍の中、自国有利な環境はありましたかもしませんが、選手たちが絶えず努力を積み重ねて得た結果であることは変わりません。また新種目では、皆で楽しみ、失敗しても「挑戦したこと自体を称えあう」という、国の隔たりのない新しい世界が垣間見えました。その一方で浮き彫りになつた我が国の抱える問題については、これを機に反省し、良き方へ向かうことを願うばかりです。

最後に、この半年間を無事に過ごせたことを御嶽大神に感謝し、毎年丁寧に教授下さる先生方へ奉納頂きました皆様、各種祭典や行事に御協力・御協賛下さいました崇敬者の皆様、各所関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。また、西岡千鶴様、齊藤慎一先生玉稿を有難うございました。

武藏御嶽神社  
公式SNS



facebook



instagram

印刷

㈱成和印刷

令和三年 十月一日発行  
〔年二回発行・非売品〕

編集 武藏御嶽神社

TEL ○四二八（七八）八五〇〇  
FAX ○四二八（七八）九七四一

<http://www.musashimimatakejinja.jp/>